

穴道湖 秋の夕暮れ

空と湖水を茜色に染めながら、穴道湖に太陽が沈む。その落日から足元の岸辺まで、黄金の帯が伸びている。その光輝く湖上のカーペットをたどれば、あの落日の彼方にある西方浄土に辿り着くかもしれない。

穴道湖の落日はそんな宗教的感傷に浸る程、華麗でありしかも幻想的で蠱惑的こわくである。湖畔に佇む人々はただ息を飲み、声を失うばかりだ。しかしこれはまだ序章に過ぎない。陽が完全に落ちると穴道湖の夕焼けの第二幕が幕を上げる。天空を舞台に茜色と漆黒の闇とがせめぎあい、壮大な色彩の競演が始まるのだ。薄墨のような闇が次第に残照を追い詰めて行くと、茜色の空はどす黒いオレンジ色となって凄みを帯びる。

その紅蓮の炎の如き残照は、忍び寄る闇と混じりあって天空を濃い紫色に変え、やがて黒ずんだ群青色に染めていく。

そして残照が力尽き闇の支配が始まると、眉のような細い月が湖上にかかるのである。

平安末期から日本人は、秋の夕暮れに寂しさと美の感情を抱くようになった。新古今和歌集には「三夕」と呼ばれる秋の夕暮れを詠んだ有名な歌がある。もしもその作者である西行法師、藤原定家、寂蓮法師の三人が現代の穴道湖畔に佇んだら・・・などと空想していたら、湖畔のカップルが突然くちづけを交わした。

仏に
仕え
る西
行と
寂蓮
がず
っこ
けた。

